

【概況】

●11日、前日の原油先物相場は、ハリケーン「ミルトン」の影響で、石油関連のインフラに影響が及ぶとの見方が広がる中、3%超高となった。この日は前日の急伸の反動から週末を前に利益確定や持ち高調整の売りが優勢となった。ただ、イスラエルによるイランの石油施設への報復攻撃の可能性がくすぶる中、エネルギー供給混乱を警戒した買いが引き続き入り、相場は75.56ドルへ反落した。

●14日、石油輸出国機構(OPEC)はこの日公表した月報で、2024年の世界石油需要の伸び予想を日量190万バレル、25年の同予想を160万バレルにそれぞれ下方修正した。見通しの引き下げはこれで3カ月連続。また、注目を集めていた中国の新たな景気刺激策を巡る期待の後退も弱材料。同国の藍仏安財政相は12日の記者会見で、景気を下支えする方針を表明したもの、財政出動の規模など具体策に言及しなかった。加えて、9月の原油輸入額が5カ月連続で減少したとの報道も需要鈍化懸念を強め、ほぼ終日売りが優勢で相場は73.83ドルへ続落した。

●15日、米紙ワシントン・ポスト(電子版)は14日、関係筋の話として、イスラエルのネタニヤフ首相が、イランへの報復として、イランの核施設や石油施設ではなく、軍事施設への攻撃を計画していると米政権に伝達したと報じた。これを受け、産油国イランのエネルギー供給が遮断される可能性があるとの懸念が和らぎ、相場は70.58ドルへ続落した。

●16日、中東情勢激化をめぐる過度の供給不安が後退したことで、前日に続き相場の圧迫要因となった。国際エネルギー機関(IEA)は15日発表の月報で中国の需要低迷を理由に2024年の世界石油需要の伸びについて、見通しをさらに下方修正。石油輸出国機構(OPEC)も14日の月報で24年と25年の世界石油需要の伸び予想を引き下げていた。エネルギー需要の先行きに警戒感も広がり相場は70.39ドルへ続落した。

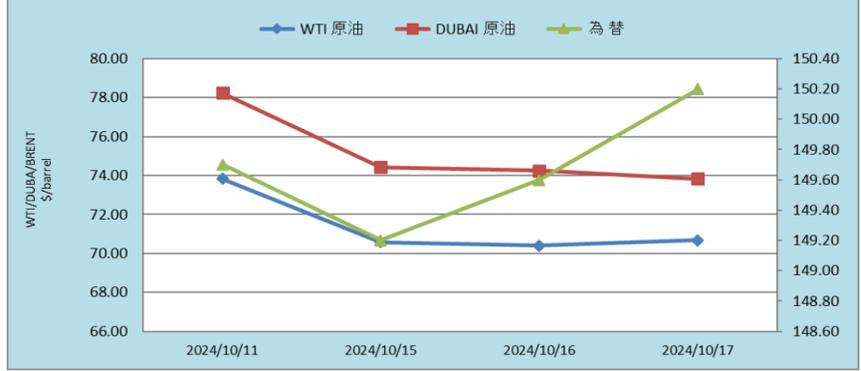
●17日、米エネルギー情報局(EIA)が午前発表した週間在庫統計(11日までの1週間)では、原油在庫は前週比220万バレル減と、市場予想(180万バレル増=ロイター通信調べ)に反する取り崩しとなった。ガソリン在庫とディスティレート(留出油)在庫の取り崩し幅もそれぞれ予想を上回った。これを背景に需給が緩むとの警戒感が和らぎ、原油は買いが先行した。前日まで4営業日続落した反動から、安値拾いの買いも入り相場は70.67ドルへ反発した。

10月18日 16:00現在 WTI原油 71.00ドル 為替 1ドル 151.13円

国内石油製品在庫 10月12日時点 単位万KL



ドル/bbl WTI・DUBAI / 為替 関連グラフ 単位 円



	次回元売変動予測	
	10/24~	元売変動予測
ガソリン	→	-0.1~+0.4
灯油	→	-0.1~+0.4
軽油	→	-0.1~+0.4
A重油	→	-0.1~+0.4
LSA	→	-0.1~+0.4

【製品卸価格】

《今週》今週の元売り仕切り改定は、3社ともに原油コストは「+3.5円」、補助金は、「-18.3円・60%」、都合「-0.5円」の改定となりました。資源エネルギー庁の公表する全国レギュラーガソリンの15日時点の小売価格平均は174.9円となっている。

《10月24日以降》次回の元売り改定は、原油コストは「-2.5円~-3.0円」、激変緩和補助金は「-15.4円・60%」の見込みで、都合「-0.1円~+0.4円」の改定予測となっている。

※原油コスト「-2.5円~-3.0円」
 ※激変緩和補助金「-15.4円」前週比+2.9円
 ※現時点での予測です。

【次世代エネルギー】 <「重力」「コンクリート」でエネ貯蔵、次世代蓄電>

10月2日から4日にかけて幕張メッセで開催された「スマートエネルギーWEEK・秋」では、最新の太陽光・風力発電、蓄電池、水素・燃料電池などの製品やサービスが展示された。中でも、リチウムイオン電池が主流の蓄電池の分野で注目されたのは、重力を利用した「重力蓄電システム」と、「蓄電コンクリート」という技術である。

重力蓄電システムは位置エネルギーを活用し、重りを持ち上げてエネルギーを蓄積、落下させて電気に変換する。TMEICが展示し、10tの重りと100mの高低差で約2.7kWhの電力を生産可能であるとされる。このシステムはすでに海外で実証プロジェクトが進行中であり、TMEICは2025年に実証設備を建設し、2030年には商用化を目指している。このシステムのメリットは、化学電池に比べて耐久性に優れ、容量の調整が容易であること、国産技術という点が挙げられる。

一方、会沢高圧コンクリートが展示した「蓄電コンクリート」は、MITの技術を基に共同開発されているもので、今後の実用化に向けたコンソーシアムを設立している。カーボンブラックを加えたコンクリートのセルを積層し、キャパシタのように電気を貯えることができる。

これにより、0.304kWh/m²の蓄電能力が確認されており、リチウムイオン電池より出力密度は低いですが、コンクリート構造物への応用によって大容量のエネルギー貯蔵が可能だとされている。福島県にて蓄電性能を検証する実証住宅を建設予定で、2027年のライセンス生産開始を目指している。

このイベントは、エネルギー貯蔵技術の新しい動向を示しており、持続可能なエネルギー供給の将来像に対する新たなソリューションを探る場を提供したといえる。